

【目的】 心房性僧帽弁逆流 (AFMR) に対する外科的介入の有効性は詳しく調査されていないため、現在のガイドラインに強い推奨はない。本研究 (心房性機能性僧帽弁逆流の疫学および治療の意義に関する多施設後方視的観察研究: REVEAL-AFMR) では、有意な AFMR を有する患者の有病率と、僧帽弁 (MV) 手術が予後に与える影響を調査することを目的とした。

【方法】 日本の 26 のセンターを含む多施設後ろ向き観察研究を行った。心エコー図のデータを後ろ向きに収集し、中等度以上の機能性僧帽弁逆流のうち、弁に退行性弁の変化がなく、左室 (LV) の機能が保たれ、左心房が拡大しているものを AFMR と定義した。僧帽弁手術を行った患者において、手術直前の患者情報を収集し、心不全の入院または全因死亡で定義された一次エンドポイントの頻度について追跡され、内科的に管理された患者と比較した。

【結果】 心エコー図を行った 177,235 人の患者の中で、中度または重度の MR は 8,867 人の患者で観察され、そのうち 1,007 人の患者が AFMR であった。これらの症例は平均年齢 78 ± 10 歳、女性が 56%、心房細動の有病率が 89% であった。内科的治療で管理された AFMR の患者と比べて、僧帽弁手術を受けた患者 ($n=113$: 僧帽弁形成術が 61%、僧帽弁置換術が 39%) は若く、EuroSCORE II は同等だったが、MR がより重度で、LV と左心房が大きく、症状がより多く、心不全入院の既往がより高かった。中央値の追跡期間は 1,040 (717~1,172) 日で、189 人 (18.8%) の患者が死亡し、286 人 (28.4%) が主要合併症を経験した。多変量解析では、AFMR のための僧帽弁手術は医学的治療と比較して良好な結果と関連していた (ハザード比: 0.44 [0.26~0.74]、 $p=0.002$)。168 人のマッチング患者で不死時間バイアスを考慮した傾向スコアマッチング解析は同様の結果を示した (ハザード比: 0.47 [0.24~0.93]、 $p=0.029$)。サブグループ解析は、重度の AFMR を持つ患者に対する僧帽弁手術の影響は、中度または中度から重度の AFMR を持つ患者よりも大きかったと示唆した。このように、REVEAL-AFMR では、日本における中度または重度の AFMR を持つ患者は年配で、イベント発生率が高いなどのこの疾患における基本的な情報が多く得られた。また、僧帽弁手術が予後を改善する可能性が示唆され、今まで治療法の定まっていなかったこの疾患に関して、治療の方針を考える上で重要なデータを示すことができた。

マッチングを行った上で内科治療群と僧帽弁手術群におけるイベント発生率

